

東アジアの遣隋使

——『遣隋使がみた風景』の刊行に寄せて

氣賀澤保規

一、遣隋使の史料——『隋書』
倭国伝と『日本書紀』推
古紀今からちょうど一四〇〇年
前、推古朝の日本(倭)から対馬海峡を渡り、朝鮮半島の
西岸ぞいに北上し、山東半島
の先端近くから上陸して時の
都を訪れた使節がいた。相手
国の名は隋、すなわち遣隋使
がこの使節である。日本の歴
史はこれを契機に、本格的に
国際社会と関わる段階を迎え
ることとなった。遣隋使というと、わたした
ちは誰も、「日出ずる処の天
子、書を日没する処の天子に
致す、恙なきや」という有名
な一節を思い起すだろう。高
校の日本史や世界史の教科書
に必ず出てくる記事である。
これを伝えたのが中国側の正史『隋書』倭国伝、隋の大業
三年(六〇七)に倭王の「多
利思比孤」から隋の煬帝に宛
てた国書(正式な手紙)の冒
頭にくる言葉である。六〇七

年は推古一五年にあたる。

倭国伝にはこれにつづけ
て、国書を見た煬帝が大変立
腹し、「蛮夷の手紙は大変無
礼である。今後二度と奏上す
るな」と命じたとし、しかし
にもかかわらず翌年(六〇八)
には隋臣の裴世清を倭に遣
し、皇帝の命を伝えさせた、
と記録する。そして面白いことに、この両年にわたる出来
事は、ほぼ重なる形で日本側
の史書、『日本書紀』からも
確認された。これによって日
本側の使者の名が、小野妹子
であることが補われた。遣隋使はここにわかるよう
に、『隋書』倭国伝と『日本書紀』の推古紀を軸にして組
み立てられることになる。た
だ忘れてはならないのは、両
史料は六〇七年から六〇八年
の、妹子の遣隋使と裴世清の
遣倭使にかかわる記述以外
は、直接交錯するところはない
ということである。そして
この史料上の制約と偏りが、
様々な課題や疑問を生み出
し、一面でそれにある種のふ
くらみを与える一方、難しさ
を印象づけてきたのである。二、遣隋使をめぐる課題と疑
問一斑

遣隋使をめぐる主たる課題

や疑問を、いま小野妹子と裴
世清の遣使において少し紹介
してみよう。まず関心を集め
てきたのは、煬帝はなぜ倭の
国書を「無礼」として立腹し
たのである。それは「日出
ずる処の天子」「日没する処
の天子」の表現で、倭を「日
出処」、隋を「日没処」とし
たことか、あるいは倭王が「天
子」と名乗ったことからか。

倭の使者(小野妹子)はま

た、「海西の菩薩天子が重ね
て仏法を興」したため、「仏
法を学ぶ」ために遣わされた
と説明したが、この「仏法を
重興」した「菩薩天子」とは
誰のことか。隋の初代の文帝
か、それとも現皇帝の煬帝を
指すのか。さらに隋から帰国
時、煬帝から託された「国書」
を、妹子は百濟人に「掠取」
されたと報告したが(『日本
書紀』)、それは事実か。そう
でなければ彼は「掠取」され
たと偽る必要があったのか。
か。そもそも煬帝の国書は本
当にあったのか。

他方、裴世清の遣使に目を

向けると、煬帝は一度激怒し
ておきながら、なぜこの遣使
を認めたのか。その意図はど
こにあったか。彼は倭に到着
後、倭の王(倭皇・天皇)に
挨拶するが、それは女帝推古
天皇か。そもそも倭王「多利
思比孤」とは誰を指している
のか、聖徳太子(厩戸皇子)
が天皇(倭王)として表に出

たのであろうか、などなど。

このように次々と巻き起こ
る疑問にどう答えるか、限ら
れた史料状況のなかでそれを
行うことはなかなか大変な仕
事となるが、さらに私はより
根底的なところで残された課
題があると感じている。すな
わち、妹子の派遣されたのが
なぜ六〇七年であったかであ
る。従来一般に、聖徳太子の
もとの改革が一段落を告
げ、体制が整ったのをうけて
出されたと理解され、特別に
問題になることはなかった。

すべて日本側の事情だけを考

えればよかったからである。
しかし考えてみると、東ア
ジア国際関係に足場を築くこ
とを目指していた倭国が、相
手国の都合を顧慮せず、常に
一方的に使者を派遣すること
はありえただろうか。双方の
都合が一致することで遣使の
実効性が生まれる。だがその
ような発想は従来どこにも見
られなかった。相手の立場に
も目を配ること、この場合隋

の国内情勢に踏み込んで考えることは、つまり東アジアの視座から遣隋使を見直すことにつながる。このような見方に立つとき、右の六〇七年間問題はどうか。

三、小野妹子はなぜ六〇七年に隋に使いしたか

煬帝は六〇四年七月、皇帝になった。一説によると父の文帝を殺しての即位であったが、即位後ただちに、文帝時代に不足していた外交活動に本気で取り組みはじめた。東アジア世界の盟主になるという野望がそこにあった。彼は

裴矩なる人物を外交政策担当の懐刀とし、まず西域シルクロード方面の諸国を呼び込み、並行して東アジア諸国にも隋への朝貢を働きかけた。このことで隋に敵対する高句麗へ、包囲網をつくる意図もあった。

こうして諸外国に働きかける準備期間をへて、即位から三年ほど経った六〇七年頃か

ら各国の来貢が活発化し、六一〇年までのピーク時にそれまで知られなかつた国々が都の洛陽に姿をみせる。倭使が訪れた六〇七年はまさにその時期であった。

このことに関係して、一つ注意しておきたい史料がある。『隋書』煬帝紀の大業四(六〇八)年三月条の、百済・倭・赤土・迦羅舎国、並びに遣使して方物(諸国物産)を貢す。

という記事である。この時期、小野妹子はまだ現地に滞在しており、倭国伝で倭使が国書を献上したとあったのはこれにあたりと解釈できる。

とすると、倭使は百済使や東南アジアの国々といっしょに煬帝に面会した形になり、ここにおいて倭が煬帝の呼びかけた外交戦略に応じて動いたことが裏付けられる。

小野妹子の使節団が倭の一方的な立場だけで出されたのではなく、相手の隋の国際化路線にも対応していたことが

認められるとすると、倭は当時大陸情報から隔絶されていたのではなく、百済や高句麗をつうじて大陸動向を確実に把握し、独自の国際戦略を練っていたであろうことがみえてくる。本場の仏教を受け入れるために用いた「海西の菩薩天子」も、煬帝を指してのことになる。倭使が用いた「日出処天子」「日没処天子」が、煬帝を怒らせた理由にしばしばあげられる。いまその中身にふれる余裕はないが、これも隋の国内状況を知っての表現とすると、また別の解釈も生まれるのではないか。

煬帝は倭の姿勢を怒りながら、裴世清を使者に送った。なぜまだ下級官僚で名も知られない裴世清に白羽の矢が立ったのか。一番の理由は彼が裴矩の近い姻戚であったためと考えられる。外交責任者である裴矩は、隋の国際戦略に応じて現れ、対高句麗との関係でも重要な位置にある倭を重視し、まず相手の国情を知

る必要があると煬帝を説得し使者を出すことにした。裴世清が選ばれたのは、裴矩の同族であり、その意を含んで行動できる若手人材として信頼されていたからであった。

四、おわりに——新たな遣隋使理解にむけて

遣隋使は倭が初めて本格的に国際社会に足を踏み入れた行動であり、日本史における大きな転換点に位置づけられる。国家の形をどう整えるかを模索するなかで、隋との間合いをはかりながら、それは実行された。それゆえ遣隋使にはつねに政治的色彩や緊張感がつきまとい、次代の遣隋使の姿とはやや様相を異にする。

それにしても小野妹子の時の遣使には、ある種のしたたかさや落ち着きとでもいおうべき雰囲気を感じられる。これはどこから来ているか。そこで浮かび上がるのが、前掲の六〇七年遣使の前に出された

「倭国伝」だけの記事、隋の開皇二〇年(六〇〇)、倭使が突然現れ、文帝から後進性をたしなめられたという件である。『日本書紀』には対応するものはない。しかしこれを第一回の遣隋使に配すること、妹子の使節団が第二回目となり、遣隋使としてもっとも重要な使命が課された意味と役割がみえてくる。

以上、本稿は、『遣隋使がみた風景』(八木書店、二〇一二年二月)で考えた一端にふれたものである。東アジアの視座から遣隋使をとりあげること、従来見えなかつた一面に光が当てられることを期待した。国の進路や外交で混迷する現在、そうした国造りの原点に立ち返って考えてみる機会もあってよいのではないか。

(明治大学)